

成長の家

川崎ゆきお

益田良春は思い切って上司に意見を述べた。普段思っていることを率直に述べた。イエスマンの益田にとっては並々ならぬ決心で勝負に出た感じだ。

どこかで自分の意志を出さないと、このままでは上司のペースだけが優先されると感じたからだ。

しかし、結果は裏目に出た。

「悪い本でも読んだのかね」

「いえ」

「君が言うべき問題ではないよ。おとなしく指示に従ってればいいんだよ。会社の問題を君が言うべきじゃない」

上司は主流派に属していたため、反主流派的な益田の意見が耳障りだった。そのため、聞こえない場所へ移動を言い渡された。

益田はノーと言える自分を示せばよかったのだが、そのノーが命取りになった。

息子の良和は失恋し、立ち直れないまま日々過ごしていた。もう二度と恋愛はしないと思うようになっている。

妻の明子は近所から爪弾きされ、それを乗り越えようと、様々な手を打ったが、すべてが裏目となり、弾かれる距離が以前よりも長くなった。

益田は帰宅後、すぐに妻に話した。

「移動って？」

「玉碎だよ」

「言うだけのことは言ったんでしょ」

「ああ」

「言い過ぎたのかも」

「そうじゃない。俺が意見を言うことに驚いたようだ」

「それより良和、学校に行かないのよ」

「失恋のショックか」

「部屋にこもったままよ」

「何度も話し合ってるよ...良和とは。これ以上言うことはないさ」

「それより、近所の人、すれ違っても目を合わさなくなってるの」

「話し合いが足りなかったじゃないのか」

「普通に話しかけたわよ」

「まあ、引っ越して間もないからな」

「ねえ、移動でお給料下がるのでしょ。この家のローン大丈夫？」

「頑張っって課長になれるはずだったんだけど、裏目に出たよ。もう何もしないさ」

「そうねえ、わたしも近所付き合い、諦めるわ」

この一家は成長止めたが、その後はそれなりに平穏な日々を過ごしている。

了